



●多品種栽培を手掛ける村田農場では、麦18ha、ソバ13ha、ニンジン6ha、トウモロコシ5haなど、畑の内訳もさまざま。転作のサイクルもあるため、作付面積は少しずつ変動するそうです。



●農業にける情熱で結ばれた村田さん親子。「農業で地域を元気にしたい」という熱い思いが原動力になっています。



●奥様の倫子さんは埼玉の出身。「新得町立レディースファームスクール」の15期生として村田農場で研修を受け、スクール修了後も「もっと農業について学びたい」と町に残ったことが縁で純一さんと結婚されました。

明日を語ろう！ 北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。

●農業への愛情と誇りで地域ブランドを守る
祖父が拓いたこの土地で
農業を引き継いでいくという使命感。
手間暇を惜しまずに努力を重ね、
もう一度ユリ根生産を活気づけたい。

「新得町」 村田純一さん



●村田純一さんは地元の高校を卒業後、農業専攻科のある学校に進学。そこでユリを研究したことが役立っている、と話します。「将来は無菌室をつくって、ユリ根の種づくりや品種改良にも挑戦したいと思っています」



農業をなくすことはできない 小さい頃から芽生えた自覚

新得町市街からトムラウシ山方面に向かう途中にある屈足地区では、初夏の陽光の中で、農作業がピークを迎えています。今回訪ねた村田農場でも、ニンジン畑の不織布掛けが終わり、トウモロコシ畑の土づくりに取りかかったところ。「今年は天気が良過ぎて、雨が少ないのが心配」と、村田純一さんは作業の手を休めて広大な畑を見渡しました。

純一さんは新得町に入植した農家の3代目です。当初は酪農も営んでいたそうですが、父親の博さんの代で畑作に一本化。現在はご両親と奥様の倫子さんの一家4人で、農場を切り盛りしています。

計画的な多品種栽培で 生産と収益の安定化をめざす

村田農場では、約55ヘクタールの畑で特産品のソバをはじめ、小麦やビート、ニンジンやトウモロコシなど、多品種の栽培を手

小さい頃から家業を手伝っていたこともあり、中学生のときには農業を継ぐ決心をしていたという純一さん。そこには「祖父の代から続いてきた仕事を、自分がやるわけにはいかない」という責任感と、農業への深い愛着がありました。「本当はトラクタの運転手になりたいんだけど」と笑いますが、農業について熱心に語る姿からは、やりがいや手応えを感じている様子が伝わってきます。

掛けています。また、町のブランド野菜として全国に出荷されているユリ根の生産農家としても知られています。

「多品種の栽培を効率的に行うには、計画性が重要です。特にユリ根は一度作ると、10年間は同じところに植えてはいけないと言われるほど気をつかう作物。連作障害などを防ぐためにも、どの作物をどこで栽培するか、毎年試行錯誤しながらサイクルを決めています」

●ユリ根は出荷まで4年間もかかるうえ、毎年植え替える必要があります。愛情を注いで育てた村田農場の「新得百合」は、現在、台湾やシンガポールにも輸出され、高級食材として人気を集めています。

わさびの栽培です。収穫量の大半を全国展開する居酒屋チェーンに卸していて、メニュー名にも「村田さんの山わさび」と記載されています。栽培には多くの手間が掛かりますが、自分たちが作ったものが多くの人の口に入り、その味を評価してもらえることに、喜びを感じるといいます。

「父はいろいろなことにチャレンジしたいタイプ」と純一さん。ギョウジャニンニクを冬場にハウスで栽培したり、自家生産のそば粉でそばを打つたりと、発想もユニーク。「次はアスパラを作りたい、と言っているんですよ」と純一さんは苦笑しながらも、長年のノウハウに裏打ちされた判断力にはまだまだかなわない、と博さんへの尊敬の念をにじませます。

「ユリ根ブランドを守る」 秘めた使命感と未来への夢

純一さんはユリ根栽培に強いこだわりを持っています。かつては新得町内でも多くの農家がユリ根を作っていました。手間と時間がかかることから生産農家が激減。今は、村田農場がブランドの存続を支えています。「実は、うちでもユリ根の出荷をやめていた時期がありました。でも、伝統やブランドを絶やしたくない、という思いが強く、再び生産を始めました」

ユリ根は少しでも傷が付くと価値が下がってしまうため、栽培には細心の注意を払います。芽が出てからは除草剤を使わず、草取りは手で行い、つぼみも葉を傷つけないように丁寧な摘み取りをします。病気に弱いため、こまめな防除も必要です。収穫は

プラウで土を起こした後、一つ二つ手で優しく掘り出します。畑にかがみ込む作業の連続に、倫子さんも「ユリ根は本当に大変」と頷きます。

収穫後の選別は家族4人で行います。ご両親は一瞬で見分けるそうですが、純一さんはまだ迷うことも。「秀品か優品かで迷ったら、僕は低いランクにしています。「新得のユリ根はすごいね」と言ってもらいたいから」という言葉に、妥協を許さない意思の強さを感じました。

「将来の夢は、いいユリ根を安定的に作ることで、できるなら、農作業が楽になるような品種改良にも取り組みたい。そうすればユリ根を生産する農家も増えるはず。新得町が誇るブランドとして、ユリ根をまた盛り上げたいですね」



●父親の博さん自慢のコンバイン6台が収められた農機具小屋。どれもきちんと手入れがされていて、大切に使い続けていることがうかがえます。